くまもと文学・歴史館報

くまもと文学・歴史館

くまもと文学・歴史館と江津湖の風土

本中　眞
（奈良文化財研究所所長）

こんにちは。二〇二二年四月二十三日、くまもと文学・歴史館主催の講演会において、「人が育んだ水辺の景勝地の保護―水前寺成趣園から江津湖へ―」と題するお話をさせていただいた奈良文化財研究所の本中　眞です。コロナ禍にも拘わらず会場までお越しいただいた方々、配信録画を視聴された方々のすべてに対し、改めてお礼を申し上げます。

くまもと文学・歴史館のロケーション

くまもと文学・歴史館が位置する熊本市南郊の江津湖（えづこ）とその周辺の地域は、明治初期に細川家の別邸である「砂取邸（すなとりてい）」の屋敷と庭園が営まれた場所として知られています。その後、大正期には「江津花壇（えづかだん）」という料亭の庭園となり、今日にその面影を伝えてきました。水前寺地域の豊かな湧水が育んだ水辺の環境は、藩政期から近代に入り、別荘や料亭を営むのに好適の地として愛されてきたわけです。今もくまもと文学・歴史館の南に広がる低地には、湧き出る水がせせらぎと水面を形づくり、さらにその南方には夥しい数の芭蕉の群植地が広がるなど、往時の庭園の独特の風致が残されています。

砂取邸跡の庭園から江津湖へと続く水辺の風土

庭園の池水は加勢川（かせがわ）を経て南の上江津湖へ、そして沿川の湧水を集めて水量は豊かさを増し、さらに下江津湖の広々とした水面へとつながります。くまもと文学・歴史館は、このような独特の意匠を持つ歴史的庭園に臨んで立地し、上江津湖から下江津湖へと続く水辺の風土と不可分の関係を持っているのだということが分かります。ふたつの湖沼を含む加勢川沿いの地域は、昭和五年（一九三〇年）に都市計画法に基づく風致地区となったのをはじめ、昭和三十五年（一九六〇年）以来、熊本市が「水前寺江津湖公園」として都市公園の拡張を進め、市民が水辺の風土に親しめる空間として開放してきました。今も公園内の遊具の周辺に集い、水辺の生き物と戯れる子どもたち、そして散策やジョギングを楽しむ人々の姿からは、「水前寺江津湖公園」が地域にとって無くてはならない存在なのだということが強く伝わってきます。

くまもと文学・歴史館に期待するもの

昨年の四月にくまもと文学・歴史館をお訪ねした際、私は久しぶりに庭園やふたつの湖沼の周辺を散策する機会を得ました。また、展示室では庭園や江津湖にまつわる重要な絵図・史料が公開されており、初めて見る史料にとても感激したのを覚えています。江津湖の湧水を制御する江津塘（えづども）（清正堤）が築堤され、今日私たちが見る江津湖の姿がどのようにして形成されてきたのかがよくわかる解説であったと思います。このような企画展（特別展「湧水と生きる―江津湖の歴史と文学―」）は、庭園を含む江津湖界隈の風土に立地する文学・歴史館だからこそできるものなのだとも思いました。可能なら、図録により展示資料とその研究成果を公開することが望まれます。水辺に刻まれた人々の歩みを地域に固有の土地の記憶として将来に継承していくうえで、くまもと文学・歴史館の今後の活動に期待したいと思います。

本中　眞（もとなか・まこと）
一九五四年生まれ。文化庁主任文化財調査官として名勝や世界遺産の保護に携わる。二〇二一年四月に奈良文化財研究所所長に就任。専門は造園学、景観研究。

第８号
目　次

巻頭言　本中　眞（奈良文化財研究所所長）……１頁
特別展・企画展・関連行事報告 ……２頁～６頁
収蔵品展・共同展示・マンガコーナー・館蔵資料ミニ展示報告 ……７頁
新収蔵資料・友の会事業・佐藤信館長連続講演会報告 ……８頁

特別展――

湧水と生きる
江津湖の歴史と文学

期間　令和４年３月17日～５月23日
会場　展示室１・２・３

第三十八回全国都市緑化くまもとフェア（三月十九日～五月二十二日）に合わせた特別展を開催。江戸時代から現代までの約四百年、江津湖の湧水とともに生きた人びとの歴史と文学について紹介した。展示資料点数は五十九点である。

第一部（展示室１）のテーマは「江戸時代の人びとと江津湖」。第一章「人びとの暮らしと江津湖」では、十七世紀初めの検地帳（熊本県指定重要文化財）や、砂取の出小屋（商売を営む店）を調べた記録（古閑家文書〔個人蔵、熊本大学永青文庫研究センター保管〕、公益財団法人永青文庫所蔵資料〔熊本大学附属図書館寄託〕）などから、堤防（江津塘）の築堤によって田畑の開発が進んだことや、江津湖が川尻方面への物資の輸送路であったことなどを紹介。

「絵図にみる江津湖」では、池部長十郎らの測量に基づいて作成されたといわれる「加勢川絵図」など、江戸時代から明治初期の江津湖の姿をひもといた。第二章「熊本藩細川家と江津湖」では、「御鷹場御建川等之儀ニ付諸帳書抜」（公益財団法人 永青文庫所蔵資料）や「御苔場記録抜書」（古閑家文書）などにより、江津湖は熊本藩主が鷹狩や漁を楽しみ、幕府へ献上する水前寺苔を育てる特別な場所として管理されていたことを明らかにした。

第二部（展示室２）は「明治以降の江津湖と文学」をテーマに、第一章「明治・大正の文人たちが見た江津湖」では、夏目漱石「子規へ送りたる句稿」などから、明治以降、江津湖が文人墨客の集う保養地として賑った様子を紹介した。第二章「昭和以降の江津湖と文学」では、中村汀女句・堅山南風画額「浮草の寄する汀や阿蘇は雪」、安永蕗子歌幅「朝靄の薄れゆくま、江津とよぶ冬麗母のごとくみづうみ」などを展示し、江津湖が人びとの憩いの場として親しまれ、多くの作家たちの作品にも残されてきたことを取り上げた。

関連イベントでは、記念講演会として①松平盟子氏（歌人、歌誌『プチ★モンド』代表）「安永蕗子の歌と人生～水のいのちに触れながら」（三月二十六日）、②本中眞氏（奈良文化財研究所所長）「人が育んだ水辺の景勝地の保護　水前寺成趣園から江津湖へ―名勝の視点から―」（四月二十三日）を開催（いずれも十三時三十分～十五時、後日YouTubeでも録画配信）。①は、心に響く語りで、江津湖を愛した歌人、安永蕗子の人生と短歌の奥深さに迫った。②は、景勝地としての江津湖の位置づけと価値を明らかにし、地域が一体となって保全に取り組む必要性を説いた。

子ども向けワークショップ「だれでもできる！創作キットで俳句をつくろうin水前寺・江津湖」（五月一日十三時三十分～十五時）では、小学生ら二十三名（保護者も含む）が参加。当館周辺を吟行し、創作キットを使いながら俳句をつくることで、水前寺・江津湖の自然の豊かさや文学についての理解を深めた。

ギャラリートークは、①四月十七日と②五月十五日の十三時三十分～十四時に実施。参加者は①が八名、②が十六名であり、江津湖の歴史と文学への関心の高さが伺えた。

全国都市緑化くまもとフェアとの関わりでは、フェア会場を対象としたスタンプラリーに当館も参加し、緑化フェア来訪者が当館へ回遊する姿も見られた。今回の特別展は、緑化フェアと併せ、水前寺・江津湖の文化資産の魅力を広く発信することができた。

企画展――

松本唯一と松本文庫
～カルデラに魅せられ、書物を愛した学者～

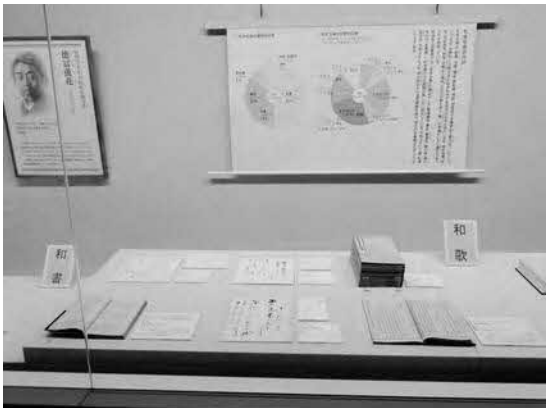
期間　令和４年８月５日～９月26日
会場　展示室１・２

熊本県立図書館所蔵の〝文庫〟を紹介する企画展シリーズの第四弾として、松本唯一が収集した蔵書群「松本文庫」と、生誕一三〇年を迎える火山学者・松本唯一の功績をあわせて紹介する展示会を開催した。熊本県立図書館所蔵の松本文庫の他に、阿蘇火山博物館、熊本博物館、松本唯一遺族からも資料が提供され、展示資料は全一二七点となった。

第一章「地質学者・松本唯一」では、東京帝国大学時代の講義ノート、戦前における四大カルデラ（阿蘇、姶良、阿多、鬼界）の論文、地質調査の資料（六・二六水害調査、フィールドノート等）などを紹介した。熊本県に委嘱され、昭和三十八年に完成させた「熊本県地質図」からは、岩層の区分を六四色に塗り分け、少しの誤魔化しも許さない学者としての姿勢が伺えた。

第二章「阿蘇カルデラの解明」では、阿蘇火山研究史をたどりながら、阿蘇カルデラの成り立ちを紹介した。明治時代に阿蘇火山研究の第一歩を記した伊木常誠、昭和初期に九州カルデラの存在を指摘した松本唯一、カルデラ火山噴火を四回に修正した小野晃司などをとりあげた。

第三章「松本文庫とは」では、松本文庫一五〇二七点を種類別・分野別に紹介した。種類別では、和書七七一六点、洋書一九三〇点、雑誌三二七〇点、教科書九七八点、地図・地質図一一三三点と多種多彩で膨大なコレクションであることが改めて分かった。分野別では、火山学・地質学を中心とした自然科学が全体の二五％を占めるが、歴史地理（一九％）、文学（一二％）、社会科学（一〇％）、哲学・宗教（八％）など専門以外も多かった。種類別・分野別に該当する資料（「萬葉集略解」、「蘆花全集」、「歎異抄講話」「寫眞週報」等）を展示したが、唯一の学識がいかに豊かであったかを物語っていた。また、令和三年に三男・松本崧生氏、令和四年に次女・原山府氏から追加寄贈を受けた、唯一が欧米留学時に購入した洋書「暗黒大陸横断記」や、戦後に軍国主義の強い箇所を墨で塗った教科書（「よみかた三」）も展示した。



第四章「松本コレクション」では、唯一が採取した岩石・鉱物（阿蘇火山博物館・熊本博物館蔵）を紹介した。阿蘇溶結凝灰岩、パホイホイ溶岩、蛍石、水晶など三十点と、唯一直筆標本ラベルも展示した。唯一の岩石・鉱物に関するエピソードも紹介した。

図書館ギャラリーには、阿蘇火山博物館が記録した噴火時の写真の拡大パネルや、熊本県文化企画・世界遺産推進課から提供された阿蘇カルデラの風景写真を展示した。

企画展関連行事として、八月二十八日に小林哲夫氏による講演会「カルデラ火山研究者としての松本唯一先生」、九月二十三日に折田豊生氏による講演会「歌人　松本唯一先生」を開催した。当館職員によるギャラリートークも三回開催した。会期中には、松本唯一遺族をはじめ、唯一と交流があった方が来館され、松本文庫や唯一に関する話を伺うことができた。

煩悶と運命
―朔太郎と熊本のゆかり―

期間　令和４年10月14日～12月５日
会場　展示室１・２

萩原朔太郎の没後八十年に当たり、全国の文学館・美術館・大学などがそれぞれ朔太郎に関する展示を行う「萩原朔太郎大全２０２２」の参加企画として開催。萩原朔太郎記念・水と緑と詩のまち 前橋文学館と熊本大学五高記念館の協力を得て、関係資料四十八点を展覧した。

展示室１では、まず朔太郎の自筆詩稿「晩秋」、「我れの持たざるものは一切なり」（ともに前橋文学館蔵）を展示。原稿用紙に記された独特の筆跡が、来館者の目を引いていた。続いては「明治の熊本」と題し、朔太郎が第五高等学校入学のため訪れた明治の熊本に焦点をあてた。もとより九州の要所であった熊本は「鎮西（九州）第一の都会」（「調停意見書」）であったが、西南戦争後に軍用地となった山崎練兵場が城下に横たわり、商業発展を阻んでいた。明治四十年前後は練兵場を移転する市区改正と新市街地の開発が進められ、また安巳橋―水前寺間の軽便鉄道も開通。近代的に発展しゆく熊本に朔太郎はやってきた。

次は本展のメインとも言える「朔太郎の五高時代」コーナーである。前橋文学館所蔵の書簡を中心に、熊本に暮らす朔太郎と、朔太郎が体験した熊本の姿を探った。たとえば入学直後の萩原栄次宛書簡では、「始めて寄宿生活に入り愉快」、「気候は余りよくない」などと述べ、学友と訪れた水前寺公園を「宏大壮美」で「意外に立派」、「頗る詩的なる小川」があり「ボートの練習を始め」たと記す。生まれて初めて親もとを離れ、見知らぬ土地で快活に過ごす様子が伺える。一方、五高記念館が保存する生徒課の日誌（複製を展示）では、寮で起きた盗難事件被害者に朔太郎の名があり、高校生活の始まりが楽しいばかりではなかったことも伺えた。そのほか「発火演習」（修学旅行）で訪れた日奈久温泉や、当時「熊本第一の大通」であった唐人町の絵葉書など、家族宛に送られた書簡を展示。古写真と朔太郎の言葉がとらえた熊本の姿が注目を集めた。

以上のように朔太郎は、家族に明るい報告をしつつも、一面では進路に悩んでいたようだ。「方針につきては煩悶中」、「今日の状態にては最早文学士となるより外に仕方なく先づ之を以て自分の運命と決定」。従兄の栄次に宛てた書簡からは、父のような医者になれずとも、何者かになろうともがく姿が読み取れる。このころ第二学年に進学できなかった朔太郎は第六高等学校（岡山）へ移り、熊本を後にした。

展示室２では、詩を書き始めた朔太郎が交流した詩人たちについて、「熊本」をキーワードに紹介した。南関町の母の里で生まれた北原白秋は朔太郎の詩壇登場に関わり、第一詩集『月に吠える』に序文を寄せている。当館所蔵の自筆詩稿や歌幅などにより、その作品や生涯をたどった。丸山薫は晩年の朔太郎と親しく交流した詩人だが、丸山家は代々熊本藩士の家柄であった。そのルーツを含め、朔太郎の薫宛書簡（前橋文学館蔵）などから、二人の文学的・私的にわたる交流を紹介した。蔵原伸二郎は阿蘇生まれの詩人で、朔太郎の影響で詩作にのめり込んだ経験を持つ。代表作『岩魚』所収の「黄昏いろのきつね」自筆詩稿などを展示した。

最後にトピック展示として、朔太郎が短歌を投稿していた雑誌『明星』を取り上げた。与謝野鉄幹ら新詩社社友が「五足の靴」として九州を訪れたのが、朔太郎来熊の約一ケ月前であったという縁にも触れた。

会期中には岩本晃代崇城大教授による講演「熊本ゆかりの詩人と萩原朔太郎―北原白秋・蔵原伸二郎・丸山薫―」を、また、詩人の伊藤比呂美氏と四元康祐氏を招いた対談イベントを開催。朔太郎の詩を中心にひろがってゆく世界に参加者は引き込まれていた。

企画展「煩悶と運命 ―朔太郎と熊本のゆかり―」関連行事

記念対談　伊藤比呂美×四元康祐

令和４年
11月19日

朔太郎と中也

伊藤比呂美（以下、伊藤）：伊藤比呂美です、よろしくお願いします。

四元康祐（以下、四元）：四元です、こんにちは。中也、賢治、朔太郎。賢治は別格なのでちょっと封印して、詩人は中也派、朔太郎派の二つに分かれる気がしています。伊藤さんはどっちが好き？

伊藤：私？ 中也。高校に入って勉強しなくなったとき、ずっと手元にあったのが中也で。詩集をボロボロになるまで読み、もう一冊買ってボロボロになるまで読んだ。それから、おお朔太郎っていうのがいるな、と。でも、当時は太宰にもハマってて、高校時代は「トカトントン」で「ゆあーん ゆよーん」でした。

四元：共通するものあるよね、中也と太宰には。朔太郎はちょっと違う。

伊藤：少女の伊藤比呂美という、まだ全然何もわからない人間がいて。地に足をつけて立ち上がったときに、「お前はお前だ！」という肯定感をもらったのが中也であり太宰だった。朔太郎は、日本語をもっと恣意的に考えて、「日本語にはこれができるだろう！」みたいなのを教えてくれた。

四元：僕もかなり似てる。中二で中也を好きになって、高校では仲のいい友達が朔太郎を好きだった。文化祭があって、僕が中也、彼が朔太郎の研究発表をしたんだけど、そのときに僕は、「自分は朔太郎ではなく中也なんだ」って、非常に意識した。だから詩人になって、中原中也賞はもらえずに萩原朔太郎賞をもらったのは、実はすごく複雑で、今でもちょっと根に持ってる（笑）。

伊藤比呂美氏

朔太郎の詩と詩論

伊藤：『月に吠える』の「竹」の、このリズムは何だろう。「生え」「生え」「生え」「生え」って。連体止めの詩なんてなかったんですよ。

四元：当時は口語も文語も、自由も定型も、大和言葉的な調べも、漢詩の勇壮たるものも、同時多発的で混沌としていたんでしょうね。彼は『月に吠える』という革新的な詩集の後、十年ぐらい準備して『詩の原理』という詩論を書く。その内容というのが、今の詩は散文詩だ、と。散文を行分けにして並べたものを詩と呼んでいるだけ。それで音楽性が出せていればいいが、大半はそうではない、あんなもの詩ではない、と。自分の詩もそうだと言って、勢いで文語の、漢文調・五七調の詩を書いて。最後は長い作文のような、今僕たちが言っている意味での散文詩を書く。「口語自由詩を確立した」と言いながら、正反対 ―― 詩の反対の散文、口語の反対の文語に進んだ。もっと器用な人だったら、破綻させずにうまく発展できたのかもしれないけど。

伊藤：朔太郎が言う「韻文」ってどんなもの？

四元：五七の定型だと思う。彼の持論によれば、詩はもともと宗教的な儀式で歌い踊るものだった。そこからまず踊りが抜け落ち、歌になり、歌からメロディーが抜け落ち、リズムが残る。それが、日本語においては五七のリズム。それをさらに否定して、自由詩は普通の平坦な話し言葉だ、と。朔太郎は、リズムやメロディーを失っても、なお音律美が感じられるものを求め、それを本当の詩と考えた。でも、たとえば『月に吠える』の「春の実体」。この詩、はじめは朔太郎の主張通り音楽的な、「竹」と同じタイプの詩なんだけど、最後に、「よくよく指の先でつついてみたまへ、／春といふものの実体がおよそこのへんにある」。こんな、身もふたもない散文的な言葉をひゅっと付け加えている。こんなふうに『月に吠える』には、すでに音律美とか口語・文語とかいうものを突き抜けた、戦後の僕らが書いている詩みたいなものがある。後年、朔太郎が文語や散文詩を書いたのは、矛盾や後退ではなく、もともと彼の中にあったものじゃないかと思う。

伊藤：非常に面白い分析ね。私は「竹」に仰天して、あのすさまじさにすごい影響を受けた。あと、朔太郎の詩には気持ち悪い、べらべらした、びらびらした、びちゃびちゃしたものがいっぱい出てきて、そういう詩と言えば朔太郎だった。「春夜」とか「くさつた蛤」とか。それから、私がよくひらがなを使うのは、中也でも賢治でもなく、朔太郎の影響だったのかもしれない。ひらがなと漢字の大きな違いは、読むときの意識がゆっくりになること。漢字の「水流れ」ではなく、ひらがなで「みづながれ」だと、意識がゆっくりになる。ゆっくりになったところに体がついていく。それが、朔太郎の詩の、すごく朔太郎的なところ。

伊藤比呂美（いとう・ひろみ）
詩人。東京生まれ。アメリカ生活を経て現在は熊本在住。詩やエッセイのほか新聞での人生相談、古典の現代語訳など多方面で活躍。熊本日日新聞において「がまの穂通信」を連載中。詩集に『河原荒草』（高見順賞）、『とげ抜き 新巣鴨地蔵縁起』（萩原朔太郎賞、紫式部文学賞）、『道行きや』（熊日文学賞）。その他の著書に『良いおっぱい悪いおっぱい』『切腹考』『ショローの女』など。

犬と猫

伊藤：「猫」っていう詩、これはもうめっちゃ、めっちゃ好きなんです。

四元：ここで問題。朔太郎自身は犬だったでしょうか、猫だったでしょうか？……『月に吠える』、吠えているのは犬ですね。それで、この「猫」の詩の最終行、「ここの家の主人は病気です」。これ、猫に見られている「主人」が朔太郎でしょう。つまり、朔太郎の猫は、詩なんです。それも、決してあり得ない、誰にも書けない詩。散文で自由で、普通の言葉で書きながら、そこに、えも言われぬ匂いや音楽、音律美といったものを感じさせてくれる。それが、彼にとっては「猫」だったんじゃないか。それに比べて朔太郎自身は犬。〝猫に恋した犬〟なんです。中也はやっぱり猫じゃないかな。

伊藤：なるほどね。私がもう一つ、朔太郎にふらふらっと行ったのは、オノマトペ。ざっくり言うと、中也には「ゆあーん ゆよーん」ぐらいしかオノマトペが出てこない。

四元：朔太郎でオノマトペといえば「鶏」。「とをてくう、とをるもう、とをるもう。」これが鶏の声よ？ こんなのどこから出てくるんだろう。

伊藤：すごいと思う。たとえば「ゆあーんゆよーん」、中也詩を英語に訳すプロジェクトで、喧嘩になりそうだったんだけど、それでも決まらない。この言葉がどこから来たかもはっきりわからない。でも朔太郎の「とをてくう」、これは鶏の声を聞いてるでしょう？

四元：この詩は詩集『青猫』――また「猫」なんです。伊藤さんは猫派？犬派？ 両方飼ってるらしいけど、性格的には。

伊藤：めっちゃ、犬。ものすごく忠実で、ご主人様の顔を見ておろおろしてる。猫の、あのいい加減さは「何考えてるんだ？」って思います。

四元：最初の話で、僕は「中也と朔太郎だったら中也だ」と思ってた。でもだんだん、僕は猫ではなくて犬だ、とぼとぼした犬だ、と痛感するようになって。そうすると、今度は朔太郎に親近感を抱いてしまいます。

伊藤：もしかしたら人間って、若いときはみんな猫で……

四元：かもね。自分勝手でね。年取るにつれて、どうしても自分の力では動かせない〝煩悶と運命〟に出会って、犬と化していくのかも。朔太郎はそれを分かってて、デビュー作で『月に吠える』って言ったのかな。『月に吠える』を出す前に熊本にいて、挫折の連続で。落第して、岡山に行って、岡山でも駄目で。

伊藤：でも、それは中也も同じ。中也と朔太郎、共通点を挙げると？……ふたりとも医者の息子です。

四元：本当だ、すごいね。そうすると、さっきの「春夜」や「くさつた蛤」の、あの内臓感覚は手術？ 摘出した患部とか？

伊藤：朔太郎の詩そのものじゃない？ 私、「くさつた蛤」も好き。あっ、この詩の最後の「くさつた息をするのですよ。」って、この呼びかけは、さっき四元さんが指摘した……？

四元：そうそう。何かぎりぎりで、身もふたもないところまで行っちゃう。

伊藤：自分の実存みたいなものをつかまえて、抱えて、ばっと吐き出す。これは「現代詩」の基本なんですよ。

四元：そう！ 僕が言ったのもそこなの。

伊藤：そこなのよね。

口語と文語

伊藤：朔太郎には天才的なリズム感覚があって、それで『月に吠える』を書けちゃった。でも詩論の方は、言っていることは面白いけど……。世の中の趨勢というか、日本語がどうなっていくかっていうのが見えてなかったんじゃない？

四元：彼は口語自由詩の父だと言われるけれども、本人はその時々で、ただ犬として、月に向かって、猫に向かって吠えている。それが、あるときは美しい口語の調べになり、あるときは文語の漢文調になる。社会の趨勢や文学史、自分のコントリビューションとかは全く考えてない。面白いのは、三好達治が文語の「郷土望景詩」を絶賛していること。もしかしたら『月に吠える』より素晴らしい、「閃光的な燃焼」とかって。

伊藤：えっ、絶賛？

四元：はい。ところがその後に出した文語の詩集『氷島』はボロクソなんです。……『氷島』と「郷土望景詩」。三好達治には、この差が天と地ほどに見えているけれど、僕らには何度読んでもわからない。同じ文語の中にあるその差が、彼ら、特に朔太郎にとっては切実だった。とすると、文語や口語、定型とか自由とかは、実はそんなに問題じゃなかったのかもしれない。

伊藤：朔太郎の時代は、中也とか賢治よりもっと、何もかもが同時多発的に動いていたんでしょうね。では、いい時間になりました。皆さんありがとうございました。四元さん、すごく面白かったです。

四元：ありがとうございました。

四元康祐氏

四元康祐（よつもと・やすひろ）
詩人。大阪生まれ。長くアメリカ、ドイツに暮らし、国際的な詩のイベントにも多数参加、詩に小説にと活躍。熊本文学隊ミュンヘン支部長。詩集に『世界中年会議』（山本健吉文学賞、駿河梅花文学賞）、『噤みの午後』（萩原朔太郎賞）、『日本語の虜囚』（鮎川信夫賞）など。近著に『龍に呑まれる、龍を呑む――詩人のヨーロッパ体験』がある。

収蔵品展 アーカイブズシリーズ

アーカイブズに見るくまもと19

◆没後八〇年　放浪の歌人　宗不旱
くまもとの歴史をよみとく
期間　令和４年６月10日～７月18日

●没後八〇年　放浪の歌人　宗不旱

「ふる郷になほ身をよする家ありて春辺を居れば鶯の鳴く」等、歌碑が県下に六基建ち、万葉の調べ高き短歌でその名を留める宗不旱。「放浪の歌人」「硯工不旱」と呼ばれ、各地を放浪。歌を詠み、硯を作って生涯を貫いた。雑誌「文庫」など若き頃の作品掲載誌、自筆書幅、硯道具、歌集「荔支」の原稿等、彼の作品と生涯を辿った。

●くまもとの歴史をよみとく

加藤清正が肥後を治めるために作成した検地帳（熊本県指定重要文化財）や、人吉藩相良家に遺された江戸時代初めの山村騒動の記録、明治の県政資料を読み解くことで、時の為政者たちがどのように熊本やその関係地域を治めようとしたのかを紹介した。

アーカイブズに見るくまもと20

◆生誕一〇〇年　児童文学作家・竹崎有斐／地租改正一五〇年～年貢から税金へ～
期間　令和５年１月４日～２月27日

●生誕一〇〇年　児童文学作家　竹崎有斐

二〇二三年に生誕百年を迎えた児童文学作家の竹崎有斐について紹介した。愛用した筆記具などの遺品や、山本有三路傍の石文学賞を受賞した自伝的青春小説「花吹雪のごとく」、野間児童文学賞を受賞した「にげだした兵隊原一平の青春」を自筆原稿と共に展示。

●地租改正一五〇年

明治政府が行った地租改正から、一五〇年を迎えるにあたり、熊本県立図書館が所蔵する県政資料や、家わけ文書などを展示した。政府に増税猶予の措置を求めたことを記した県政資料や、明治一〇年に熊本県下で起こった農民一揆を記録した淵上家文書、壬申地券・改正地券を展示した。

共同展示 3・11文学館からのメッセージ

◆震災の記憶と復興エール
会期　令和４年３月11日～５月10日

東日本大震災を契機に始まった、全国文学館協議会による共同展示「３・11文学館からのメッセージ」は十回目を数え、今回で最終回となる。当館では、熊本地震に際して、全国の文学関係者から寄せられたメッセージの一部を展示した。

マンガコーナー

今年度は、収蔵品展に合わせて、熊本ゆかりのマンガ『ワンピース』、『スラムダンク』、『夏目友人帳』などを設置。八月の企画展「松本文庫展」に合わせ「山と戦記」をテーマに『岳』、『不死身の特攻兵』などを設置。十月からは、「萩原朔太郎展」に合わせ「近代文学」をテーマに『月に吠えらんねえ』『文豪ストレイドッグス』を設置した。資料はＮＰＯ法人熊本マンガミュージアムプロジェクト、合志マンガミュージアムより提供。

館蔵資料ミニ展示

◆県庁の公文書に見るくまもとの記憶

熊本県立図書館には、「熊本縣公文類纂」と呼ばれる戦前期の熊本県庁の公文書が収蔵されている。これらをもとに、くまもとの記憶をひもとく第一弾として、「明治天皇行幸１５０年」と題するミニ展示を行った。

明治五年六月、天皇は西郷隆盛を筆頭とする供を従え、さきに熊本藩から献上された軍艦龍驤に乗って、地方巡幸のはじめとなる西国巡幸に旅立った。奉迎する県庁では事前の巡幸先に派遣した職員の情報をもとに、行在所の確保や、百名を超える随行者の宿割り、洋学校・医学校、水前寺成趣園などの視察先の準備などに奔走した様子が記録に残されている。

「景行天皇以来」とされる巡幸を熊本の人々はどのように迎え、数え年二十一歳の若き天皇は、時代の変革の途上にあった熊本のどういう姿を目にしたのか。

ミニ展示にも関わらず、多くの観覧者から注目を集めた。

新収蔵資料

○高群逸枝遺品　愛用の机

四方七十五㌢、高さ三十㌢黒塗りで脚に彫のある、端正なたたずまいの机。堀場清子氏が『わが高群逸枝』を執筆の折、高群のパートナーである橋本憲三氏から贈られたもの。高群逸枝著『火の国の女の日記』に「私には、私のあわれな仕事はじめの日のことが、その後長い歳月がたっても忘られない。―仕事場はできたけれども、五坪の書斎のまんなかに、三尺の机をぽつんと置き、『古事記伝』（本居宣長）を一冊のせて座ったとき、書架や書庫にはまだ何一つなく、金もなく、多難な前途がしみじみと思いやられた日のことが。」（傍線は引用者による）と書いた机のことと考えられる。

厳しい研究者生活を自らに課した逸枝のそばに常にあったその机から、逸枝のありし日を思いめぐらすことができる貴重な収蔵資料の一つとなった。

友の会事業

◆定例事業

○**月案内発行**　くまもと文学・歴史館の行事等を会員へ送付。

○**文章勉強会**　毎月一回開催。有志による文章講座。

○**歴史勉強会**　毎月一回開催。有志による古文書講座。

◆湧水発行

会員の作品を集めた文芸誌「湧水」の三十号記念号発行。

◆今年度の主な事業

4月24日　湧水講演会
演題：「障がいを持った子どもたちとともに歩む」講師：寺山よしこ氏

5月7日　友の会総会（佐藤館長による記念講演会）

5月10日　初夏の文学・歴史散歩（江津湖周辺散策　くまもと花とみどりの博覧会見学と文学碑巡り）

11月27日　湧水講演会
演題：「意外と簡単！漢詩の読み方・作り方」講師：林　孝子氏

2月11日　湧水特別講演会
「短歌を楽しみ、生を楽しむ」
講師：阿木津　英氏

佐藤　信館長　連続講演会

佐藤 信館長

古代史研究の第一人者である佐藤信館長による四回にわたる連続講演会を開催。肥後の古代史が、列島や東アジアの歴史と密接に交流しながら展開した様相について、最新研究の成果も交えながら、具体的な解説があった。また、くまもと文学・歴史館ＹｏｕＴｕｂｅチャンネルにおいて、各回の講演会動画の配信を行った。

第一回　6月18日
演題：「江田船山古墳出土の鉄刀銘文」

第二回　8月27日
演題：「筑紫君磐井の戦いと肥国」

第三回　10月29日
演題：「古代山城鞠智城と列島・東アジア」

第四回　令和5年1月28日
演題：「肥後守道君首名と肥後国府」

くまもと文学・歴史館のご案内

所在地
熊本市中央区出水２丁目５番１号
（熊本県立図書館併設）
電話（０９６）３８４―５０００㈹

開館時間
午前９時30分～午後５時15分

休館日
火曜日・毎月最終金曜日
年末年始・特別整理期間

入場料
無料

最寄りの交通機関
(1)市電＝「市立体育館前」下車・徒歩５分
(2)バス＝「水前寺公園・県立図書館入口」下車・徒歩５分

文学・歴史館友の会会員募集中

この会は文学や歴史に関心のある人々の自主的な集まりです。

くまもと文学・歴史館を核として、文学・歴史愛好者の大きな輪を作りたいと願って組織するものです。

詳しくはくまもと文学・歴史館受付へお問い合せ下さい。

くまもと文学・歴史館報
第８号
令和５年(2023年)
３月31日発行
編集
発行　くまもと文学・歴史館
〒862-8612
熊本市中央区
出水2丁目5番1号
電話096-384-5000㈹
FAX096-385-4214